



図書館での出会い

会員 三好 涼子 (61 期)

私は図書館が好きである。子どもの頃から本が好きで、いつも家の近くの図書館に通っていた。図書館には、たくさんの本があり、新聞や雑誌もあり、CD もあり、図書館にいと少し大人になったような気がして、嬉しかったものだ。

一番多く図書館に通っていたのは、司法試験の受験時代である。本を読んだり自習をしたりするスペースがあったので、勉強するために通っていたのだが、息抜きに本や雑誌を読んでいた。中でもお気に入りには絵本を読むことで、絵本は短いのですが読み終わるし、かわいいイラストを見たり、感動するストーリーを読んだりすることで、とても癒された。

弁護士になってからは忙しくてあまり図書館に通わなくなったが、子どもが生まれてから、子どもを連れて再び毎週のように図書館に通うようになり、絵本を手にするようになった。

図書館では、季節に合わせた本の特集が組まれていたり、様々なイベントが開催されていたりするが、先日、戦争特集が組まれており、娘が一冊の絵本を手にとって、熱心に



読み、借りていた。その絵本は、原作・田中幹夫 弁護士、文・寮美千子、絵・真野正美「ぼくが子どものころ戦争があった「いくさの少年期」より」(ロクリン社)という絵本で、娘は貸出期間の2週間で10回以上読んでいた。

娘になぜその絵本を何度も読んでいるのか尋ねてみたところ、どうやら弁護士の方がご自身の戦争体

験を書かれた内容が絵本になっているということで、将来弁護士になりたいと夢見る娘の琴線に触れたようである。また、リアルな戦争の体験記というのも、あまりなじみがなく、引き込まれたようだ。

そこで、私もその絵本を読んでみたところ、少年時代に福井県で戦争を体験された田中幹夫弁護士のリアルな体験記が絵本となったもので、戦争についてわかりやすく描かれ、大変胸に迫る内容で、私も何度も読み返してしまった。恥ずかしながら、福井県にも大きな被害をもたらした空襲があったことを、初めて知った。今度福井県に行ってみようとも思った。詳しく存じ上げなかったのだが、田中幹夫弁護士は、ご自身の戦争の体験記を「いくさの少年期 1941～1945」(文芸社)という自伝的小説として出版され、その後、その本を原作として、紙芝居「いくさの少年期 1941～1945 ぼくが子どものころ戦争があった」(京阪奈情報教育出版)とこの絵本が出版されたようである。この絵本は、戦争体験の伝承として、多くの学校に置いていただきたいと感じ、さっそく、娘の学校にお願いに行こうと考えている。会員の皆様も、子ども時代に戻った気持ちになって、絵本を手にとってみていただければ幸いである。

この絵本以外にも、図書館には、戦争に関する本がまとめておかれ、展示室には空襲の写真がいくつも展示してあったので、子ども達と一緒に展示を眺め、平和を祈って鶴を折り、壁に貼って帰宅した。私自身、戦争についてはどこか他人事だったが、改めて、子ども達とともに、学ぶ機会を設けたいと思う。

図書館には、絵本をはじめ、様々な出会いがあるので、これからもずっと通おうと考えている。私にとって、いつでも落ち着く場所である。